ふるさとへぐり再発見

馬　具

13

乗馬の用具である馬具は、古墳時代中期以降、古墳に副葬されるようになり、この風習は後期まで続きます。

また、馬具を装着した馬の埴輪が古墳に立てられた例もあり、この頃には乗馬が行われたことが窺えます。

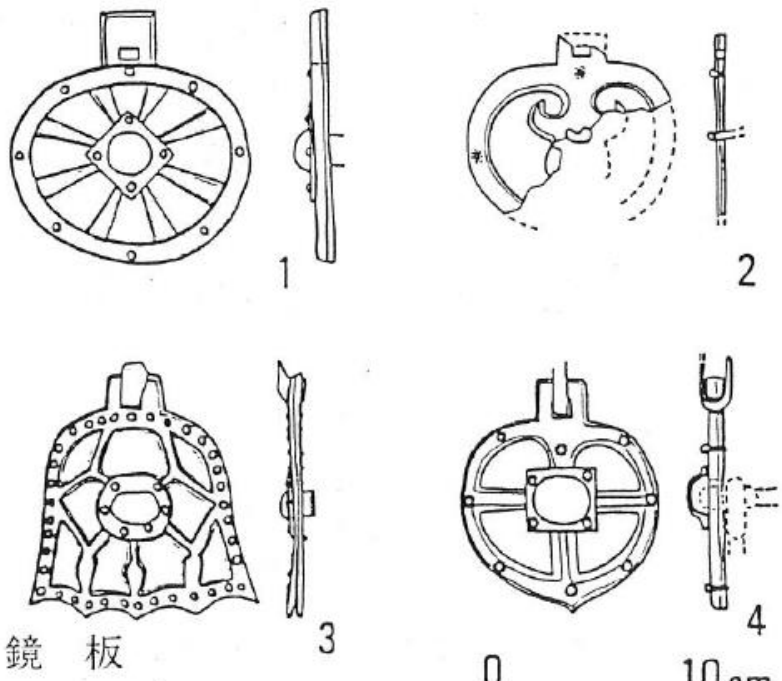
出土した馬具より、簡素で実用的なものと飾りたてた儀式用的なものに大別されます。斑鳩町藤ノ木古墳の馬具は、装飾馬具の最高のものといえます。

そして、時代により形態も変化していきます。

馬具には鞍のほかにたずなを付ける轡（くつわ）部分、足を乗せる鐙（あぶみ）やバンドを固定する雲珠（うず）・辻金具・飾りとしての杏葉（きょうよう）等があります。

平群谷では大塚山、烏土塚・三里古墳などで馬具が出土しており、古墳時代後期の馬具について知ることが出来ます。

大塚山では大型の雲珠をもつ実用的なものが、烏土塚では二例の装飾馬具が、三里古墳でも装飾馬具を含む二例が発掘調査で見つかっています。



1・2 烏土塚、3・4 三里古墳出土品

図は、鏡板（かがみいた）で、馬の口に棒を咥えさせ、たずなを付ける部分の飾り金具です。

烏土塚・三里古墳の出土品は、大和における6世紀後半の優秀な馬具として、奈良県立橿原考古学研究所付属博物館で常設展示されています。